訓詁句選

語類

上

中村俊定文庫
文庫 18
230
1

狐竹の子

禁無断複写

閲覧

貸本

禁帯出

閲覧

いかゞへちかき人乃
矢勾とそいひける人乃
名こそ聞ゆれ
春こゝろ
ゆくりなくも
袖風

石士晩年之門人於柳亭

水府藏書

句選語類兩篇標出引用之書

宗鑑犬筑波
貞德戴恩記
同御傘
新續犬筑波
毛吹艸
崑山集
德元初學抄
季吟埋木
滑稽太平記
守武千句
同淀河油糟
鷹筑波
犬子集
久流留
玉海集
立圃明鏡
武藏曲
江戸三吟

芭蕉翁二十五ヶ條　曠野
猿蓑　續猿蓑
奥細道　續虛栗
其角雜談集　同句兄弟
誹番匠　田舍句合
嵐雪其袋　泊徳一字幽蘭集
祇空朽葉集　鷄筑波
一師傳秘事ゟ所の書こゝに神をのそく
一天ゟ初經ゟ爲姉て原本編なり、永錄四
年十月十五日ゟ書ゟ始たるハ連歌の天

水ゟ負宝ゟまで利出たるまで神ゟ良徳。
ゟより出ゟを原本ゟ
一季立ハ誹ゟ於て季吟四季ノ詞ゟ善ゟるハ
なし一見合ゟハ温故ゟ設ゟ錄可ゟ
一貞徳の句利鈍ゟ紀ゟあるゟを終ゟ是上國の武
庫ゟ書頭九ゟ家ゟ天水良藥長良ゟ雅
三五十三ヶ條等ノ書あり
一芭蕉此道の氣格を失ゟて腐横頗婦ゟ
そのぬゟ張ゟ其角行ゟ彊撃の未英雄人を
欺むくゟゟあたゟ初利

定家つ

ちるこゝをおもひてゆくあしひ

作尋ぬる人も

さゝぬ秋そ

艾廣つ禹九

ちさむうみ東籠ゐもちねう那

宗祇はし師　稚玉庵

笹白ふ雪ハ多双のらすゝこのふ

さゝゝれる
田羽堂この産
てくいうをを
夜ゝ上ゝ秋を
ゝ一と秋白あそゝゝ秋
とや
なの一この名を探
教つるとゝみワキ
つゝみゆゝりしゝり
とゝゝ
一本ニ安法國の
なゝゝしゐれや
上ゝ秋とれとゝは
のやゝうあゝゝ
秋りゝとゝ
りゝむゝ
東つくゝ秋法
とれのは作や

この田家よろ
不の山ちるものの
ものかな
嵐山集に負徒弟
なけや秋の風
八情の哉
秋の夜
九ツ人の作も
八情
萩の白露
秋の夜

関ちえて
八情萩の哉
おもや秋の風
宗長
行秋
関次
橋もりの
墓住
あさちやよ
兼載
景盛 初中後ノ八論語ニモ通スヘシ

竹馬狩
涼
玉海集に兼
東山遊覧
祇園の
所々
古人
紹巴
連歌
涼
玉海集に兼
東山遊覧
祇園の
所々
古人
紹巴
連歌

家ちちの家
玄旨 出家二住住吉
よしやふ秋
涼しさよ
屋号をおもふ
利休 居士 宗易
夢も笠もて
澤庵 東海 禅師
何もなし

家ちちの家
玄旨 出家二住住吉
よしやふ秋
涼しさよ
屋号をおもふ
利休 居士 宗易
夢も笠もて
澤庵 東海 禅師
何もなし

サヌキノこうおこ
宗經の一來庵こ
とうう
両條よ庵をむす
む門ハ設とうと
お学こ當やうり
かくて教を掲へ
ゐるよ
その竹
此を法人う称を
而設をうよのうよハ
教も同ならこう
ゐるく
手本可」賣
竹林不賣
とう門されをうくそ
能もかなるく價を
取て世をうふ
とうぐるうのよ
とうくう

詠詩

宗綜 山崎 疑源抄 和漢朗詠集 二百首 アリ

あんけいもく
衣川ちうれとうくのう
多をついて夢中あるく
うう能
きさ秋くうく若草
まさ
よう〳〵しいつまく宍 ふきのとう
竹の子のみ
親のあるく

又庵の額ヲ
上ノ客ヲ上坐ヨリ
中ノ客ヲ日坐ヨリ
下ノ客ヲ泊リ懸
トウ
上ハ客ヲ中ヲヨリ
下ハ泊ノ二ヲトヨリ
ハ下ノ下ノ客
ト云者ノ境界ヲ
云ツヽトウ

雲雨
清水秋くや 松ふくう
野宮
うしやし 星
みやこのうは 情あいふ
草世
宗綜をいつ〳〵
ちと風あ

天文十二年八十四歳ニ而卒

守武 義本田

とも梅やうるはしくも神垣の春
ちる花を南風やみつの岸のひるの静
青柳のすゑやくもらぬ久方の雨の川
かすみやは世
うしろまで又紛来也神垣山
嵐より松風くく
天文十八年八月八日 七十七歳ニ而
辛ス

貞徳 松永 通称 長頂九氏 延陀九ヶ 明心居士

せきとめぬ谷の岩水音たえて
梅の花香や雪の曙
うしろ髪ひかるる道の柳かな
一もとや松のこなたも春の雨
落ちぬ葉もあるを焼さへ
うぐひすの声にみがける初音かな
雪有花一度ふるかと思ふ哉
不殺生戒を

[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

おもしろくも
因おかし
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

負汐一負室一負怒
怒の門人負涯やと
らんもとみし
誂のとも

任口上人 芭蕉翁
キ翁雅誂集ニ人ノ
紹介ノ事アリ
ノ俤ノ吟
ヤ
ヤ

山桜てハ酒をかこそ菓思ふ郎
雨雫ヲ徒をかこそ哉
よいとし六十四ヨシ

辞世

今までの自をハハとらんし年もあきの月

任口上人 伏之西岩寺

門の家乃俤ありし秋の月
大こゝハ自をゝめで 七十二

忠知

忠知ハ白スミ忠知ともいふ
古池や蛙飛こむ水の音
一説晋子山吹や
古池や蛙飛こむ水の音
文毋主師ノ句境也

えりや何
何こそつゝ
向岸や
梓世

家自やあるハ家自や戒ハ新法一

芭蕉翁 桃青 風羅坊

毒なの秋や
毒もやハらし
古池や蛙飛こむ水の音
文毋ハ師ノ句境也

紙

芭蕉翁　晋子雪中の神も
みるべき人なれば
めしまねきよせて
ものしまするを
あるじもかたらひ
ぬる比合歓堂
石霜菴まで
おくりし
ふるき山正風を
あるじとせし
翁の俤従三千
門下入室
流波のごとく

新しき峠くゞりて花を
さがさん神
やうやう死の
雛壇いくつ人を解
なでしこや椅乃露
菖蒲や去年まう学の
苔牀やよもぎ
恰のひみ
山路来て
世を隠す
荒海や佐
ひやくと
雪折
ひいらぎ
廋なの
あらく
うらの
杜若
續扶桑隠逸傳
芭蕉翁
傳あり
学に愛二荘老一専ら
事二参禅一
廣甫
筆硯の外
餘長なし
と

雨行うらしろひきの像の發を
のそそそそそ
蛸
そそそそそ

芭蕉翁の墓文庫
參りそそそ
宗祇のやとそ外
とそそそれそそ一
紙を壺中そ納
この塚のあそし
とそそそ（下略）
ふりそそそる
あそそむ其の嵐の
墓もそそそぐ
とそのあそや

こそそむあそ　なほ此のそれ
羽子のや　木そ雫も　こそそ角
そそそそそそ雨の傘そと
そそそそそ
世そふそもさそそそ宗祇の（イニやとそ）しそれそか
酒のあそいてとそそそれね　其のそる
雪ちそや穂屋の薄の刈跡
いそそしなそそそ雲の　桜の木　笠
あそそ　何そもそかきのふそそそそけ
風のそ身ハ俳諧　非ス　紙そそそそか
蔥白そそあそひそそそそそそか

を世よ三居士の
墓とそそ
すそそそ國そ
十そ許あそそ
前の塚作そ
そそそそ井そも
そのふそそそ
こそそそそ笠塚
とそそそん共も
なそのん
經冊塚へそそ
とそそそん
そそそそ
發句塚と定
そそそそ
共そ芳福寺
墓をそふや

産宮之社

人の
そそそ

其角　晋子　廣井　宝晋斎

人の世やのそそそれそ法寺　林
ゆそそそや何そそそ海苔の味
雨雲や　そそそそ定のあ山のつら
あそそ　そのそそ居そもそそ
ゆふそそそ法の方そそそ土の色

句兄寺二
名の月とみゝき
よ山猿呼肖落
と作なせる
みぐるも巴峡乃
猿もとをて笑ノ
月もとゞやまる処
ゝ哉利

ゆふさくや十月廿日
崖寂柱吟や
湖上ら吟や

ゆふさくや蛍ちいさき灯の栄
末世まで乃舎あるうらみの月
名月や夢ノ雲のつゝき雲の影
名月や乃ゝ乃ゝ乃ゝと独ある
寿ゝ林て猿の遠白し芳野月
さうしやうやこゝ酒の更講
帆うみやあれやう田乃そうき
こゝく寂ゆくいとなきとのくれ

さゝやうやうくこゝ名の
遠ゝあゝく世人ゝふるおく
この選よ名を
ゝゝぐれを
ゝゝ年ゝれ
他準之

嵐雪 石中 雪中庵

えりや時てく 荏乃 ねうう
蕗のとう なまて人の絵をうふ
蛸壺のこゝろもぬ 綿すゝ秋
つくゝ本ゝゝ系をゆるや秋の風
名月や柳の枝をこゝおく

画賛

ゝかし年寄ゝし絆ゝを

辞世

一葉ゝ落 吐一葉ゝ散風乃上

年くや　佑雯
先年尋う別荘
ゑくの鳥や
日暮　沿湖亭今
ゑ雪　風葉
ゑくく和茶の
ゆ香あり
ゑ実疑亭ゑ名つ
けくゑ文自嘯
ゑし祈や

沿徳　合歓堂

年くや　蔦ぞくぞ家おもて来植
さゆり笠ゑゆし蚊屋や窓さう
鶏死夢のちゑゆゑ雪ゑ彩の雨
落ゑよと下葉うみしや菊のさは
煤ゑくおゑゆれ柳の芯

祇空　青流洞三世　雅敬雨

石霜菴　玉笥山人

ほゑゆくおて
ゑをむくし時

居士いつゑし
や　住吉ゑて
独吟の千句の
奉献
古の庵やわ雲の
服を
奉ゑゆ

ゑわゑやゑ
雲の井をゑ
誉の梅をゑ
石水海ゑし
形ゑ猪の
雀子や

又美葉ゑ
早雨
まゑ

優男なりゑや春
家ゑ志ゑ所　牡丹寿
いつ秋の樹
枕よりやゑしつ戸庇
猪手踏くゆく雫の水
編よりくく岸小舟
月のゑゑ田をわゑく
家ゑ才　遅の奥をゑむ
雨春手ゑゑのつゑを
紙ゑて

石霜庵九景

南屏勁敵

栄峯秀照

塔峯積翠

湯村煙雨

双渓長流

鴈橋帰人

題 涼見舩

松屋の額

半雲

房中

城嶺高月

双乳雲雪

庵中六物
佛祠敷
詩瓢
　錚是真汐
　息岑非俗
　肺腸
陶硯
　天倍閑日月
杜杖
　独安乾坤

なくくいつくしき烏帽子と
こゝろくに恒淡のごとく海もこゝろ
いつものなきごとくあるにまかせ
恒淡やむさし野をあるじにて
加賀やいつくを敷もくに毒もの
むさし野をあるじにて
好もくや四国をそよぎの富士
あのくもや松もなのごとく屋々毒
雪くらしてゆく年の夢も恒
花さそふ嵐や岡の松

笠
釜
　已上
阮陀宮
　笞ノ上

ノモカタ
敲空前響
手常無聲
四スミニアリ

住くらしてまし
名月やゆくくる滝の水
河豚人参とくる滝を越ふかの月
湯本
暑
うつゝ毒命乃綿や十文字
英
そよみやうつゝ浅茅わくる庵の毒
曙
鹿をそよくく一番ちしおと夜名月

こゝより舟にて
猪名の湊や
湖南亭にて、歌
江を漕ぐと
ひろ松の森
立列る早稲
前の
我影を
月
石の上
ところや
庭の

居士ひさのもと
春宵を七そ
世人名つけて
一宿客又一宿人
ともいふものと
ふるき詩句を
思ひ
たくみなる
ものから
元童 物末
紫菫
ふるき別称
ふるき詩句
巫岡陰士
ともいへり

春宵や古き詩句の
みいで
曽我兄人乃
なつかしき
しるく牡丹の花好名
ふるく
伽上
みとりの
古き詩句に庭の前乃紅梅雪嶺
ふるき詩句を
折ふるき
一えだ
ふるき詩句を
かつ
しるき
七下なりと一句

阿女集ノ序ヨ
古ニ祇空ト
不幸ニシテ
詩ノ
詩ヲ
詩ヲ
ト
雅俗約義
ヲ

引ヒ
あるあと
陰元ノ
ニ

多く牡丹を折り
吉血ヲ人
優化ノ
雪の茶半屋雪来松桃上蔵同吹ヲ待
井雅ヲ
住吉ノ
引ヒ
松ノ
何ヒあるあと
花ヲ

立圃 重頼 西武
季吟 良徳
宗因 芭蕉門人
素堂 玄里 水花
琴風
等ハ後選よりあとをつぐ
ごとく選ぶものなり

遺偈

拳手動足　平生神通
鐵牛破裂　音信不通

この子をうしなひ
悲しさの極まる時

享保十八年四月廿三日七十一歳而卒

私曰こいうい八哥まし歌けまいまし考ることそを
悟くゆるして唱ちれものち主そて地の間さ
ひとつ学してもの事ありく荀子う飛耳長
目之道とい一ちまし或ち見ぬまゐはし
ち西湖平橋ひ又八ふしお悔ひなのち橋
ゐえみし跡を今見るやうにちん仏ひ書して
いっちまゐ見のまうらおの心をも和ひ
さうおまの老の中ちこと引りをも考め待ち道
ち心敬僧都豊考速懐を心句乃言とし

古人のいまし訓や学をみる真法に教誡
おそし也と語まひ色黒に俗談平話を正
さんと発也と教まひ也人の古学
学ふ訓をそして貌魚の肆よりものハ
その臭き事をきらふやうの物のこと
さるあるを師をもとめ友をもとむ
并一大事也師よ学ふのことまて友の助ともき
ものハ業就もの独学而無友則固陋寡
聞といつり
一説仙も古文辞を用へし詩家連珠三通も

こゝろくのあらし道ハ真法まありて句ハ色蕉
まあり俳諧元禄の比色蕉流の俳集をこの
つまり古文辞とさゝ古集ともに熟
せさる物を古雅をきらふ守武宗鑑真法の
書こゝる古文辞也発句も時運の多少ある
ゆへ用ひさる辞もほこゝ仏ふ古人
一事もいひおもしるむきものハ古人の糟を
ねん奇をてらいまる人のいてさる事をと句
仏ゆへまおのつらいつゝを楽し又俳

しるす落て郭路に入ル也といへるを拾て
吾を原の翠のうへ秋うしとの新無一あるを
吾師折いつる事あり
うち打句を白むうち乃ち飛借をぬるしくや
一句もて出片仮名をもて古人こゝろ心をきゝ
み句を痩くるしむるうしろ事ちうや意
ち無尽をうく万古つくるなし正真のうつら
ざるぬさめしあめりと今の人ち句初心ち句
ふ善悪ち差おなくかうとそうりおもひとりて
日ふ練月ふ旅るの心をくやをふ入るとちうり

彩ちゆうち玄妙の心るしちうと年をおうと
おりうち其海言よいてうぬゆうおもうち
さめやれしとち
古詞書ちとりつくぐうの如くうり語士
つうしを去うふ事ち近世俊古ち中興ちる
ちのころ東都うち百番く句合して吾語士
石霜庵師一評をもひく剞劂へあうこの書妙
こ評をひくうち評の評うる事古人のかよ
うに評ち芭蕉湖東祝和書堂つうもち系をそし
ち極合用合句合題栗合とうく乃句合等いれも

古人ノ高評ありし
ト今引合スル其士ノ評ノ俤ト
ハ事ヲ見スシテ居士ノ活ヰキ
人モ多クノ人ニ
トラヽルモノ崎陽ヲ遊リ遊ヒ多ク居士
ノ高風ヲ慕ヒ書ヲ贈リ書ヲ
ヲヨソヲ多クノ今ニ至ルマテ
イヤシクモ人ヲ
奉贈洛下
青流洞高士
予薄遊ニ海外ニ於ニ茲三年矣陰ニ求ニ天下ノ奇士ヲ

原不可撲滅彼君子今不為利鎖不為名韁
浅泊明志超然物表詩境浸入在山泉眼道
阻且長沂細告勞風景仰持贈一言不我遐棄
何殊覿面

浙西 沈學齋 幷撰

一俳諧俳諧の論古今多くみえ其人多く其
宗固も人爰邑爰止とうたひ連歌の連歌
ともうたひ也と大やうに俳諧ともいひ
爰法爰義をあらそひ言爰言爰とうたひ
辭を主とする事や史記索隠に滑稽の滑字
俳の音ありと斐の音也と爭論多く古人も
いつれを是とも決しがたく定めがたしと
誹諧と字を書ても古今集の歌てより世々
和哥の撰集ありて我朝の文学をあつかふ
も俳諧をすて何を中華漢土の書を引事
や漢和俳諧ともに人爰もこの部あ

又八雲御抄或云俳諧三俳諧四滑稽
誂諧三俳諧有二種一俳諧二
戯八歟誂九教云々
篇中之篇門之名也事吟俚耳之俳
俳諧八解も心もさもにて
しかも心ある
そもそも俳諧とは心
諧と二字紀氏古今序
誂と云言篇より加
師も有来よし記集ニ誂字訓ありハ宗祇
法師也その名残ならんか
誂ハ文字ハ唐ものゝ
ことをいつるもあり
隠もなく唐の文
古誂諧と二字も唐のものより出
貫之漢字をいふ吾朝の和哥ことをもて

らくる成句し文字訓離なすべく何ぞその
事訓を用ゐるべくんやよりく諺よハイの音を
きゝとれいやそれカイと唱へてもけうよ害な
き歟さんある時ハ从人从非よりハ从言从非よ
り字義をつよはい从人訓諺ハ二字呼ばハもし
訓ある地名いつまでも字義ハ日本
訓なかるべき歟和歌之神の活玉
みもかるべき歟
諺語の別名を野句とも歌とも野句ともいふ地

歌ハ野哥あり連歌ハ野句あり俳諧ハ野句あり
素堂ハ野句久しくいふれどもとうとけうの
俳諧を野連歌ともいふ金
うるおもひのほかなる俳諧といえんよりハゆる
るやうなる
一雑俎河の雪ものしハもたうもあらず
山形いそ小まのうもれもいでぬ
小古徒の要言をあつめ免語彙と名つく又
私曰此章諺諧文字難多ハ管見を以て

後学　水光洞　祇徳選

書林　生白堂　歓之梓

一宗祇曰誹諧者非道教道非正道進正道也
一又曰ちいさい事　俚流ふうの事をいふ
人のあるべき事をいふもよくいふ
とも当流ニ不用之
一宗祇曰雑談ニ上手ニ歌ヲ他人の中より見うしなひ下手の歌類の中ニきらぬ
さきにてきる

あるべき事古人ニ深き意を
第一きらひ称徳ニ拘足跡角ニあやまる
ともきらひ
あるともきらひ古人ニ深き意をあるべき
かの誹諧もきらひ
要言ハ貴

享保甲寅仲冬

水光洞祇徳謹識

一武人宗祇法師よあひ
そとゝゑ〳〵ま
かりて後き哥ハ先ッ前句を
さ〵ゝとうまく大切の事や
一墓佑等まで〳〵
芝文るう大事也と
一武人宗長よ連哥
語ありて後き
ゆるう如〳〵事
るき茶をあ〳〵

一守武曰いとてもかゝる
花宴をそなへ俳
おの〳〵あんやうかみ
一貞徳曰誹諧人きもよろこ
道たゝ拙いおさゝまる世
一貞徳曰そもゝ誹諧と
より利やさしき句を
嬶のごとき句を誹
一貞徳曰和哥ハみよたゝ
おもしろふこゝろ

てゝも論ずる事ゝりと知へし

一貞徳曰 拙者ごとき 卑賤のなりわひたのむもの是
あるに難波津遠き山の端の大空をきつめ君
臣の道をとゝの人 義誠のそこと云ふ事ハなし
花傳ふよりまさを用んや

一貞徳曰 おゝらか人ハ名の字かを知まつる事ハ
一字ふ所迄たりともも 難君樹法のこゝろさしを為ふ
ねがふ一口のき時ハ此道理をきゝ名いてまをも
しハ学ぶくんなおもひとふるき事をもとゝ
業法ふ水くむ事もあるく作者ハ所あるべし

ものや又法ふく水ふる一切の書籍
見ふをもあゝハ卑賤事あまつをのうちおゝし
さゝゝく筋ふ前みいてゝ沢そのまゝひら
あやまりの水を其作者をそしる一書あゝ沢祖
の人ふさのふ悪ふる事ゝ上ふ准ハ下ふるのとゝ
一貞徳曰 世間の人 誰ハ上ふ准ハ下ふるのとゝ
しをふる事てそさらうそ悪ふる事ふれ
ふ承貞徳くみ口ふもあゝ中事ふるへしゝやう
みもとてよしあゝもきあゝ沢ふ事ふ
ふりもてよきとゝふりてあゝきとゝ沢ふあゝ

と中分をきりわくる事にて名よりて善悪をいふとぞ
一季吟曰筑波乃云ふ所善悪をわかつとてく
中ほどより下こゝろもものゝ名よりて人の善悪も花車なるくいのしいひ
ことをきつのらいうよまことをかたるらしき名よ
無とおもふくむしのやさしくて唱うしもむしけ
よりこゝろ笑ひを催して宗鑑法師犬筑波をあらしと発し
徒よ面さ称つ
一季吟曰花咲の発句ともうけつるさんしやう事当歌の
なごの付句ともうけつるさんしやうごひきこゝ付
うへ伺ふたびをもあぶりさんしやうなりとあぶりさんしやう
さも称つよろこ歩行ありこそうつさ称ふ
くもるをもとさもるこゝろ称つよりとや吟ふ今
かあるつよ称も一度の称ふにくこゝろ称ふ
後つさあるつよ称も一度の称ふにくこゝろ称ふ
ふ称ふ事のあらんさ称ふ冥加とそ称ふ

作るらし

一季吟曰俳諧連歌実不知云往往すりとい
ともふより出るわさをそらん人の
こゝろ口よまうやさらんハ似る事ハみゝほもあめと
笑ふる事ハいふてゝ笑ふ事をよくおもふ
とりり成一

一季吟曰俳諧ハとても
作まゐハ名物のうるてもなく
なもの一さふこいのいハ連歌よりもおとりき道ふて
作るあまゐ付作らんてゝもよくぬるや長頭丸も

さのこゝろてのうひ
一句をかさらんさあふ事ふと
こゝ作るき又ゝ又ゝ又すふ
等前ふきあるふゝ
おもふるふ

一季吟曰いふ一ハ大ぐち
大法くゝ集ゝ所ゝ
くゝひを作ゝ

さあるや作らん

一芭蕉曰俳諧ハ俗語平話を正さんゝ

一芭蕉曰佛ハ達广あり儒ハ荘あり て通ず
實有を踏雅せり 空乃至 事もや 釈と云
時ハ常ふ及ふ 通す今ふの 理也 古事も 能説の
法ハ妙法の次キ 至ふく心ハ向上ふ一路ふ 遊ふへし
とふ也
祇徒私曰 芭蕉翁二十五ヶ条ハ門人去年 あつめ書也
要言ふ一とハともやめまき似ふり
むさとふるさんもや 蕉門ふ 納ふ所の古ふ
臭徳翁門人 立圃 宣頼 西武 良徳 臭室
李吟 いつれも此人〻今ハ名あり とハいつても

師ふ口立圃ハ自ら社門ふ 松江重頼ハ維舟と
名ふるあつもあ唤ふ事ふ 西武久流面ふ功あり て良徳ふ天水を賜ふ拳ふり
あれもふ社門人秀ふ 尤臭室ハ芭
句ふ我講ふ 臭室ふ臭翁ふ 臭翁ふ
臭翁ふ 臭室ふ家ふ 李吟ふ家ふ
訪ふ事ふ 中興開祖 宗因ふ
ふ称ふ 俳諧三代ふ宗匠ふ 芭蕉の三
翁ふ 此外ふ 芭蕉ふ 事ふ

一負徒曰あまりかみのたくふかく
ゆるあまりかみの私くふかく又里ちうまきうあと
一立圃曰祝詞の書歌の心持外やうにて主の書ふ
事明祝詞ふ文書歌ふ
歌書外ホ又ハ詞の余をつひやうやう心を遣
てハ前句ふ付つきやうふ
いひをしてても一句をおとしてハ
つまあいふ
一重頼曰百韻連歌の附も祝詞辞とくく育文よし
物ふ祝詞ふも書歌ふ

やうふ時ハ連ふいきにくく
あやうきをいふ付よりはさるをのとう
一重頼曰梅桜橘等花ふ
新地の寺社町里ふ名詞ハ
あ一き俗語ふ付てハもく一むうしみなくふはのよ
いひ出るいくふ
一重頼曰俗ふ事古記新ら一ふ
といまくふ耳ふ
句作中事ふ
喜ふ一あうふ

花の作意をおもふべし
甚多 初ちるも心のひとつ
一重頼曰人名おほき懐紙
より蝶い待るよし次の付句
人名を面〻あるべき事歟
らん然るべからず
一徳元曰誹諧にてもの
人名を付の発句を一二ハつ
しらべ人の出不出をも
又いるる作者もあるべし

あるべきものといへども甚だ
難義なり付又ハ何事も
句ぶりも当意即妙の句を
らんや何事も付ても心を
一徳元曰宗祇公の角田川を
読るも連歌ハ西道とて
一躰とハいへども二躰あり一
ハいにしへ心のまゝ二ハ初の
を次第にせんぐりに
一誹元曰誹諧ハ連哥より

たのしみをなすと云ふ事一俗俚を用る事甚二八自讃
しかりてもおかしき事甚多あつて無をもよき井
甚四初心の輩などのやうに彼此心を
よせ付る事甚五十八集古事来歴を明るに
とも一句にさへ無をもとしく何事をひろくも
て付添ふ事甚多き事也五ツ也
一徳元曰誹諧も和哥より一躰を越るまでもなき俄
八仕あまつさへ親子兄弟の反故紙をおしてよこ
にくまむろう千万の相い聞致まつて又一ついふ句能
我弱輩に甚たしき事なりとくしてそうしくそうしい

めでたい百韻の中一句をそる向付五句も十句もなし
つてくる人和もしろうまもうかり
一宗因曰連哥抔宗匠手出抔つまらぬしまの事
剛しく誹諧乃判者になりてさへ毎くひつてくれゆる
とも也

ちしく合之事

一負徳曰兎角句数多よろしきもの
也一巻すてて不可倦あらん抔法度か
抔て合点なき人の前みくしく道理をも法よくとも
らぬの武国乃心也叶まじく人成一ツ

一芭蕉曰俳諧さへ合ふ事は一句二句好悪を論じて指合
ハ後の俗意成べし一指合ハ変化の百理をふくみその
本を忘れず変化の不自在成より無き指合の捉ま
貞徳式目十首歌
俳諧ハ式目そむくも大事
ふるめかしくさまでかまはず
わらんべの季寄速慮旧字
連歌のごとく古歌五句ハ三句等
俳諧ハ古歌五句
七句ハ又五句

名所国神祇尺教無常
連懐懐旧おもて
水鳥や又山類躰用無
連歌のごとくもちゆべき
鬼女虎狼躰十句を乃
面々其躰と一度一句ゟ
新式の一度一句ゟ二句ゟ
二句躰をゟ三句ゟ一
三句物ハ四句の物
四句ゟ五句ゟ

松永貞徳翁省像

新式よりうらと云ふ面を曙よりも
ちいうようてハ七句ニ
連歌みそやぬものゝ名や古事記
けやけき今ハ一ニ句ニ
貞徳云連哥のおハ又十七字ニと賦あり并ニ百韻
おゝのち誹言ニて綴もるを誹諧ニ連哥とまつ
呉ニ連哥のおもむきなれハ誹諧ニりをも
正保三年三月中旬於花咲亭定之
こゝよりも貞徳の家流ニ成ある

祖徳謨曰說話之學一家を建立するあり皆
古人の教を信ずる建立や勿論宗門芭蕉翁
勿論何れも一家窮まれも一家窮
して何れ高松の身を終る筈一家の外の諸家
一家として終るうもの一も一生涯ものも一是非
也博を貴て雜を厭ハ其人を知ものも古人
を信し甚書をうるを厭ハ取捨を辨ず
ること古今を甚人を書信ずる甚也一人ら取捨
あれ一書ら取捨あること勿ハ一人一書かしく
於ること勿ハ其の管見とす

句語選終